横芝の碑（その九十一）

天蓋に卍の紋を戴く於幾粟島様の庚申様

庚申様は、各部落の悪霊悪疫退撒を祈願して建てられ、大てい一部落の何処か一箇所、というのが殆んどのようですが、旧大総村の於幾部落には、二箇所に建っています。一箇所は、五十三年の七月に〝金比羅街道の庚申様〟としてご紹介した水神様の前に建っている庚申様で、いま一箇所は、粟島様の境内に建っています。水神様前の庚申様をご紹介したとき「寛保元年（一七四一）の前年、元文五年（一七四〇）は庚申（かのえさる）の年に当るが、何かの都合で一年遅れて建立されたのではないか」という意味のことを申し上げたのですが、粟島様境内の庚申様が、その庚申年の元文元年の建立なのです。

実は、水神様前の庚申様をご紹介した時、かねて知偶を頂いている地元の小関喜保氏（現在於幾区長）から「粟島様の境内にも庚申様が建っている、図柄も珍しいと思われるので、調べて見てはどうか」というご連絡を頂きました。

早速粟島様の境内を訪れて見ましたが、その時は、庚申塔が倒れた形で、その上に天蓋と思われる石等が重なっていましたが、表の表面金剛像等はよく判りました。図柄は、青面金剛が六肘憤怒相で二人の童子を従えています。このお姿は時折見かけますが、珍しく思われたのは、天蓋と思われる石に卍（まんじ＝仏の胸臆にありて万福吉祥の相、という）が刻まれていることと、三猿公の両側の猿が内側に向いているのです。しかし、倒れた形体から他の刻字等を読むことが出来ないまま引き上げて来ました。その中に「誰かが庚申様を土足にかけたので、地元の人が憤慨している」等という話も耳にして「若しも、破損でもしたら？」と気になって、小関喜保氏に話したりしました。氏は「自分も心配しているから……」とのことでしたが、最近「昨年の春庚申様を建て直し、今年に入って神官を招き鎮座の祭紀を行った」というご連絡を頂きました。

久しぶりに訪れた粟島様境内はきれいに清掃され、左手には、倒れていた時より遙かに大きく見える庚申様が、俗に言う〝装いも新た〟に建てられていました。勿論両面に刻まれている文字も判り読みとれました。刻字は、奉待庚申成就村内安全、元文五年七月、上総国坂田郷於幾村、とありました。

小関氏の話によりますと、「この粟島様は、和歌山県に本社を持ち、全国に末社を持つ、淡島様とは全く別の、神様である。ここに一つの伝説がある。光仁天皇の御代（七七〇～七八一）或高貴の姫が、愛情のもつれから、都を追われ、流れ流れの果てに房総に至り、粟山川の畔に着き、ここに上陸されて住み付かれ、里人の親切に支えられながら異郷の地に果てた。里人は、これを哀れみ、その霊を祭ったのが、この粟島様で、上陸された場所は〝お舟付場〟といって、地名が残っている。粟島様は元々吉勝院という寺院と合紀されていたもので、庚申様に卍の紋が刻まれているのは、その名残りではないかと思う」ということでした。また同地元の実川喜昌氏（M三十六生）も「子供の時から建っていた、他から移した、という話も聞いていない」と話してくれました。

回を追って、ご紹介することになっていますが、坂田、於幾の庚申様に刻まれている文字や図柄から推察しますと、ずっと昔は、粟島様境内添に本街道があって、坂田郷於幾村の人々が、その畔に村内安全を念じて建てたほが、この庚申様だと思います。なお、水神様の前に建っている庚申様については、小関喜保氏も、実川喜昌氏も「土屋伝兵衛という昔の有村の力者が、下総方面から入って来る悪霊退撒と五穀豊じょう、を願い自己信仰の心から建立したものであろう」と話しておられましたが私も同じように思います。

◎写真は、粟島神社境内の庚申様で（手前天蓋の有るもの）、向う側は、実川某氏の事績表銘の碑です。なお、本稿取材にあたり、小関喜保氏、実川喜昌氏に御指導を頂いたことのお礼と共に、折角の御指導内容の一部を紙面の関係で、割愛させて頂いたことをお詫び致します。

（お断り）

粟島様に入る道は少し複雑ですが、於幾部落に入ると誰でも教えてくれますので、案内図は省略させて頂きます。庚申様は鳥居と反対側に建っているのですぐに判ります。

町文化財審議会委員
小沢春光氏寄稿

▲ めずらしい天蓋に卍の紋のある粟島様の庚申様